

第30号 華山会報

平成25年4月1日

財団法人華山会

オーデマンス「一八二四年ノ略史」の原本は東京大学に所蔵されていた

華山・史学研究会

渡辺華山（一七九三～一八四二）は、三宅友信（一八〇六～一八六六）とともに、巢鴨（小石川林町「東京都文京区千石二丁目」）の田原藩江戸下屋敷で、小関三英（一七八七～一八三八）・高野長英（一八〇四～一八五〇）などと蘭書の勉強をした。華山が「外国事情書」に引用する「ニウエンホイス」（「技術・学芸一般辞典」）などの原本は「渡辺華山旧蔵書」に含まれ、国立国会図書館に所蔵されている。佐藤昌介東北大学教授（一九一八～一九七）は、『洋学史研究序説』（昭和三十九年 岩波書店）、『日本思想史大系55』（「渡辺華山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本佐内」（昭和四十六年 岩波書店）、『洋学史の研究』（昭和五十五年 中央公論社）などで、「西洋事情書」に最も多く引用されている「一八二四年ノ略史」の原本は見付からないといって、後考を俟つといっている。

渡辺華山が「外国事情書」に引用する「ニウエンホイス」はよく知られているが、「オーデマンス史略」については従来知られていなかった。東北大学教授佐藤昌介はすでに、昭和三十年（一九五五）『史学雑誌』64の4に「渡辺華山自筆稿本『外国事情書』その他について」を発表している。その後『洋学史研究序説』、『日本思想大系』55「渡辺華山」、『洋学史の研究』を執筆している。『洋学史研究序説』では「付章」を設けて「同書（『外国事情書』）に盛られた豊富な世界知識に出典が明記されている」として「略史」（原本不明、文中に『千八百二十四年ノ略史』ともあり）云々の記事がある。『洋学史の研究』では「付説 渡辺華山稿『外国事情書』の基礎的研究」で『外国事情書』の知識源として、さしあたって考えられる……『略史』の引用回数は十九回、『ブルーランズゾーン』は九回、『ニウエンホイス』が八回である。「ほとんどのデータを『新撰地誌』にあおぎながら華山がことさら『略史』を一八二四年の刊行としたのは何故か納得のいくような説明はさしあたり思いつかない。後考を俟ちたいと思う」とある。また「日本思想大系」55「渡辺華山」でも同様に、典拠とする原本が見付からないことを問題にしている。

「略史」の所在は不明であったが「ニウエンホイス」や「ブルーランズゾーン」（ルーランズゾーン「世界地理辞典」）などは国立国会図書館所蔵の『渡辺華山旧蔵書』に見える。「ブルーランズゾーン」は高野長英が翻訳し、高野長英はこれを参考にして「夢物語」を書いた。「ニウエンホイス」（「技術・学芸一般辞典」）と「一八二四年の略史」（「オーデマンス史略」1824）は小関三英が翻訳したものである。小関三英が「一八二四年の略史」としている「オーデマンス史略」の内容はデータの「新撰地誌」と異なっていない。

ここで、『オーデマンス史略』の原本が出現したことを記さなければならない。

① まず最初に、佐藤昌介教授の研究と前後して、昭和五十三年（一九七八）八月四日愛知県教育委員会告示第19号として「渡辺華山手録 1 全楽堂日録 2 客参録 3 客退紀聞」（所有者 石原享）が愛知県指定有形文化財（絵画）に指定された。田原の故小澤耕一先生は『愛知大学総合郷土研究所紀要』第32輯（1987）に「渡辺華山手記『客退紀聞』につ

いて」で全文を翻刻した。第15丁の「好義按ズルニ」は第五丁からの「ヲーデマンス史略の目録」が小関三英の翻訳であることをはっきりさせた。佐藤昌介教授は「原本は詳らかでなく後考を俟つ」としている。小澤耕一先生も『紀要』の注解では「ヲーテマンス史略Ⅱ不詳、後考を待つ」としているが、その後大分大学の鳥井裕美子教授の御教示によって「ヲーデマンス史略」は「Oudemans' Chronologisch Handboek van de Geschiedenis der Voornamste Staten' Harlem' 1824」の引用であることが判明したとわたしたちに教示してくださった。

② 『洋学史事典』(1984日蘭学会)に、書名として「大西古史紀年」が標題として採択され、人名の「烏德滿」も同書巻末の「人名地名音訳対照表」に掲載されている。「大西古史紀年」は「烏德滿原本竹雨道人藁本」とあり、オランダ語で「Onderman' Chronologische Handboek van de Geschiedenis der Voornamste Staten' Harlem' 1824」と記され、幕府天文方蛮書和解御用の箕作阮甫(一七九九～一八六三)が文久三年(一八六三)に訳出したものとする。小関三英は天保六年(一八三五)四月、幕府天文方訳員に任ぜられて「厚生新編」の訳述に従事した。ところが天保十年五月渡辺崋山と高野長英の入獄を知り、同十年五月十七日岸和田藩邸で自殺したので、小関三英の後任として美作津山藩の箕作阮甫が幕府天文方蛮書和解御用に迎えられた。推定ではあるが、箕作阮甫は小関三英の遺した「ヲーデマンス史略」によって「大西古史紀年」を訳したと考えられる。



③ 華山・史学研究会の中村正子さんは、東京大学 OPAC に A.C.Oudemans の Chronologisch Handboek van de Geschiedenis der Voornamste Staten' Harlem' 1824 を見出した。その中で、平成二十四年(二〇二二)九月東京大学の小池真准教授にお願いして、(1) 標題紙(著者が「ヲーデマンス」であることの確認)、(2) 目録(「客退紀聞」の確認)、(3) 巻末の「箕作阮甫手沢本」の3か所のコピーを入手した。「一八二四年の略史」の原本は東京大学に所蔵されていることが分かり、著作者の Oudersman は『洋学史事典』の誤謬であることが判明した。佐藤昌介東北大学教授は、『洋学史研究序説』、『日本思想史大系』55「渡辺崋山」、『洋学史の研究』において、「外国事情書」で典拠資料とされた「一八二四年のヲーデマンス史略」が東京大学に原本が所蔵されていることは想定外であったと考えられる。「東京大学所蔵本」の標題紙には著作者「A.C.Oudemans」刊年「MDCCCXXIV」とあり、「箕作氏家蔵」の印がある。「客退紀聞」の目録は、最初の「Gewijde Geschiedenis」[「神聖紀」を除く]、「Egypte」[「エジプト」]から「Vereenigde Staten」[「合衆国」]まで一致する。巻末には墨書で、「ヲーデマンス氏 世界大國年代記全書 一八二四年出版 箕作阮甫手沢本」と墨書があり、「鍛冶橋第箕作氏記」の印がある。小関三英の遺したものを箕作阮甫が承継したものと考えられる。箕作阮甫の養嗣子・箕作省吾(一八二一～四六)の子・麟祥(一八四六～九七)は明治政府に出仕し、フランス民法の翻訳を行い、法典調査会主査委員・貴族院議員として、民法・商法の制定に参画した。洋学者箕作麟祥の旧蔵書は、明治二十九年(一八九六)「箕作文庫」としたが、大正十二年(一九二三)四男・男爵箕作祥一(一九二〇～六八)から東京大学に寄贈され、法学部図書室に所蔵された。これが現在は、東京大学総合図書館に引き継がれ、現存することを確認することができた。

ふるさと学習と

嚶鳴フォーラム

田原市教育委員会委員長

山本栄子

田原市教育委員会では、平成二十二年三月に田原市教育振興基本計画を策定しました。その計画の基本理念として「ふるさとに学び 人がつなく 田原の人づくり」をあげています。重点施策の第一には、「ふるさとを愛し、たくましく生きる人を目指して」とし、ふるさと学習の充実を目指しています。

取組内容として、「田原市を理解するため、地域の人物、産業、歴史・伝統文化などを活用したふるさと学習に取り組み、また、先人の教えなどを通じて、子どもの豊かな情操をはぐくみ、公共の精神を教えるふるさと道徳に取り組みます。」とし、将来を支える子どもたちに地域を知ってもらい、地域に愛着を持ってもらうために、「ふるさと学習」を推進していくことにしています。この計画は、平成二十二年度から二十八年度までの計画で、今年、平成二十五年度は中間年度で、

前期期間での取組・評価を行う年に当たります。市内小学六年生の児童には財団法人華山会から『少年物語 渡辺華山』を毎年配布し、平成二十三年に『田原の文化財ガイド2ふるさとへの偉人を訪ねる／田原を築いた人びと』で、地域のふるさと学習の手助けとなる十九人を紹介し、二十四年には、『漁夫歌人糟谷磯丸歌碑解説』を出版しています。

今年、市制十周年を迎える田原市で、10月に嚶鳴フォーラム「田原が開催されることになりました。嚶鳴フォーラムは、「ふるさとの先人を活かしたまちづくり、人づくり、心そだてに取り組んでいる自治体が力を合わせ、その取り組みを全国に情報として発信するとともに、切磋琢磨し、先人の志と行動力に学ぶ元気な地方の交流を図ることを目的とする」と定められています。

現在、嚶鳴フォーラムには、岐阜県恵那市をはじめとし、田原市を含む十四市町が加盟しています。今年、第七回の開催地として、田原市が選ばれ、十月二十五日に、伊良湖で首長会議が、翌二十六日午後からは田原文化会館周辺で、昭和初期から続けられている田原中部小学校の

児童による歌唱劇「華山劇」や作家童門冬二氏らによる記念講演会や陽明学研究者吉田公平氏らを加えた市町長サミットが開催され、防災面での協力体制も議論されていくことになっています。

今年、渡辺華山生誕二百二十年にあたり、来年は伊良湖の漁夫歌人糟谷磯丸（一七六四～一八四八）が生誕二百五十年を迎えます。磯丸は生涯に数万首の歌を作り、家内安全・無病息災・安産の歌など請われるままに、心を込めて詠みあげています。伊良湖岬には、いのりの磯道や磯丸園地などゆかりの見どころも多くあります。平成二十六年には、文化財ガイドふるさとの偉人続編を発売し、拡充活用する計画もあり、このような時期に、嚶鳴フォーラムを開催し、学校・博物館・図書館等が連携し、市民へのふるさと学習の大切さをPRできるのは、絶好のタイミングと感じられます。市外からお迎えする多くのお客様とともに、ふるさと田原を愛する市制十周年の市民の結束が盛り上がることを期待しています。

目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P① オーデマンス「一八二四年ノ略史」の原本は東京大学に所蔵されていた
華山・史学研究会

P③ ふるさと学習と
嚶鳴フォーラム

目次

P④ 渡辺華山『毛武遊記』⑦

P⑧ 博物館所蔵品から
渡辺華山筆

P⑩ 『客坐掌記(天保九年)』⑧

P⑫ 平成二十四年度華山・史学研究会研修視察

だんじりの町岸和田と中世からの商業都市・堺を訪ねる

P⑭ 華山の田原行(十四)

P⑯ 財団法人華山会
田原市博物館からご案内

渡辺華山『毛武游記』⑦

研究会員 加藤克己

前に岩山あり、麓に観音安置したる寺あれバ、山も観音山とよぶとぞ。名を光明寺と称し、木村美濃守建る所といふ。

天保二年（一八三二）十月十五日続き

前に岩山がある。麓に観音を安置している寺があるの、山を観音山と呼ぶという。（寺の）名を光明寺と称し、木村美濃守の建てた所という。

※ 観音山 「観音山」と言えば普通は町の東方、桐生市菱町にある山を指すが、ここは光明寺のすぐ北、桐生市宮本町三丁目にある山。

※ 光明寺 桐生市宮本町三丁目にある寺。曹洞宗。寺の山号は、山の名前とは違い、大慈山。観音堂に千手観世音菩薩を安置する。

※ 木村美濃守 桐生氏の家臣で、桐生新町に帰農したという。

梅木村（この行と次の行が空白）

山のかたはらにつきて南行すれば、此山々の終る方に一小阜をなしたる松山あり。名を織石山といふ。頂は岩ほあらそひたちて織りなしたる如くなれ、かくは呼なるべし。小石祠を建つ。これは熊野権現なりとぞ。

美和神社（前号の最後）

渡辺華山「毛武游記図巻」より



梅木村

山の脇に沿って南へ行くと、この山々の終る方に一つの小さい丘をなした松山がある。名を織石山という。頂上は大きな岩石が競い立っていて織物のようにみえるので、このように呼ぶのである。小さな石の祠が建っている。これは熊野権現であるという。

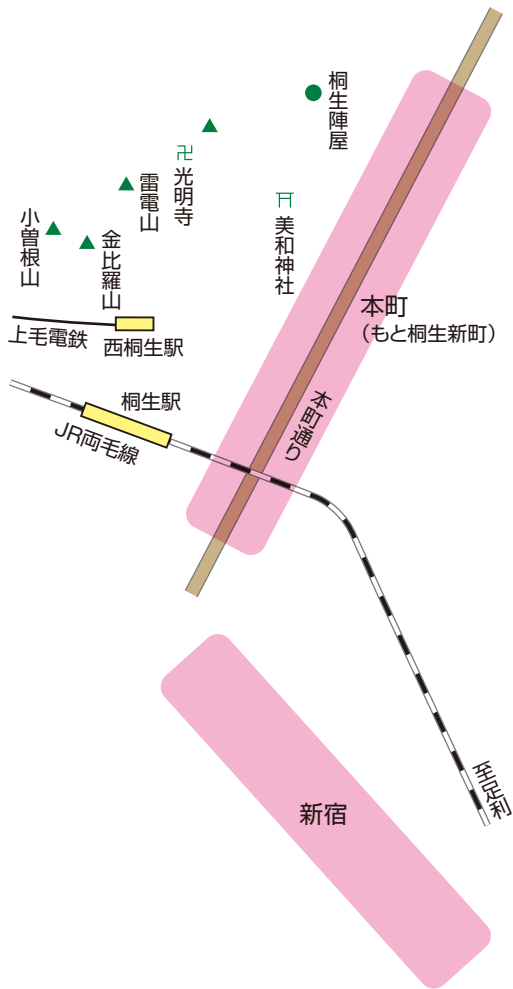
※ 梅木村 この行と次の行が空白になっており、何か書く予定があったのだろう。但し梅木村

というのではなく、北東にある梅田村（上野国山田郡、桐生市梅田町）の間違いであろうか。

※ 織石山 雷電山付近の小山のひとつ。本文にそって見れば、小曽根山か金比羅山かと思われるが、はっきりしない。なお、明治四十二年の地形図には、連山の一番南の小曽根山・金比羅山付近に「折石」という地名が書かれている。

我輩の此峰にのほりたるをしりて、麓の翁むしろもち出て酒のむところをさだむ。されど松並たちて眼をさへぎり、望むなしければ、やがてむかひの山に又一層たかくそびえたるあり。あの山のかたに菴移さんとして到れば、径な、めにめぐりくつて、いはゞさ、さひとかいふものを、さかしまにたてたらんやうにて、からうじて頂にのぼる。麓ハ松のかげ打掩ひ、陰気人をうつ。

我々一行がこの峰に登ったことを知って、麓の老人がむしろを持ち出して、酒を飲む場所を定め



桐生市内略図

忽に豁然とうちひらけたる処に出づ、これ此絶頂なり。松樹よきほどに並び立て、間に石祠あり。これ雷電明神なり。よりて山も又雷電山と称す。峯ハ東山とつらなりて終には赤城、足尾に及ぶといふ。

てくれた。しかし、松が並び立って視界をささぎっており、遠望できない。やがて向かい側にまたいつそう高くそびえた山があることに気づいた。あの山の方にむしろを移そうと思つて登つて行くと、道は斜めに回り回つており、いわばサザエとかいうものを逆さまに立てたかのようなであつて、やつこのことで頂に登ることができた。麓は松の陰が一面に覆つていて、陰気なことこの上ない。

※ さゝさび 不詳。ささぎえの誤りか。

突然に広々と開けている所に出た。これがこの山の頂上である。松の木がちようどよいほどに並び立つていて、その間に石の祠がある。これが雷電明神である。よつて山もまた雷電山と称する。峰は東山と連なつており、終には赤城、足尾にまで及ぶという。

※ 豁然 広々と開けているさま。

※ 雷電山 桐生市宮本町。現在は麓に水道貯水池があるところからもつばら水道山と呼ばれている。『桐生市史』に、「古くは頂上に雷電

宮がまつられ、現時は日華事変いらい太平洋戦争における殉国者の英霊をまつた忠霊塔が建立されている」とある。標高二〇m。広々とした平らな頂上で、桐生の町を眺めるのに適している。

※ 東山とつらなり…… 桐生の町の西にある連山なので、東山と連なるといふと奇異に感じるが、『桐生市史』によれば、雷電山の南西に連なる小山である小曾根山・金比羅山をあわせて東山と称したことがあるという。しかし、赤城は桐生の北西、足尾は北で、南西の東山とは方角が違う。北方で続いている意味か。

※ 足尾 渡良瀬川源流の山地。銅山がある。

此ながめさきことなりて、

前は下野の国小俣の山々屏立して、麓に一带の水流る。これ毛野両国の境なる桐生川なり。源は野州足尾の山中より出て、終に此郷に入。凡桐生の形勢也。

桐生の地勢手にとるばかり見たさる。

この眺めはこれまでのとは異なつていて、

前方は下野国小俣の山々が屏風のように並び立つていて、麓に一筋の水が流れている。これが毛野両国(上野国・下野国)の境をなす桐生川である。その源は、下野国足尾の山中から出て(間違ひ。注参照)、ついにこの郷(桐生)に入る。およそ桐生のありさまである。

桐生の地形が手に取るように見渡される。

※ 小俣 下野国足利郡小俣村(足利市小俣町)

※ 毛野両国の境 上野国と下野国は桐生川を国境としていたが、昭和三十四年(一九五九)、桐生川左岸の足利郡菱村(桐生市菱町)が桐生市に越県合併した。

※ 桐生川 桐生の北端、栃木県佐野市との境界

に位置する根本山に源を發し、桐生市の市街地東部を流下し、足利市小俣町で渡良瀬川に合流する河川。流長約四十八km。

※ 野州 下野国（栃木県）。

※ 足尾の山中より出て 足尾の山中より流れ出ているのは、桐生川ではなく渡良瀬川である。

人家凡一千余煙といえど竈をもて数んに八、三
四千にもいたりぬらん。町の長さハ六町と称す

桐生の町並

渡辺崋山「毛武游記図巻」より



れ、其実は十二町、左に折て二町、右におれて一町、進りて十町、これを新宿といふ。

人家はおよそ一千余煙というけれど、竈をもつて数えれば、三、四千にもなるかもしれない。町の長さは六町（約六五四m）と称しているが、実際には十二町（約一三〇八m）あり、左に折れて二町（約二二八m）、右に折れて一町（約一〇九m）、そこから十町（約一〇九〇m）、これを新宿という。

※ 六町 桐生新町は六丁目までであった。

※ 十二町 桐生新町の長さは、天保十四年（一八四三）の絵図面に南北十五町五十間（約一七二六m）とある。

※ 新宿 上野国山田郡新宿村（桐生市新宿）。

初め幕府領、領主の変遷あり、天和二年（一六八二）から旗本落合氏・安藤氏の相給。

寺院（一字空白）、神社三、酒井大学頭殿の別封なり。封ハ三百七十石、その税定額十倍すといふ。治処ハ街北西山間にあり、小吏二人、更代郡代、街の巨商佐羽清左衛門に仰せて此里を治しむ。

（桐生新町は）寺院、神社は三ある。酒井大学頭殿の別封である。封は三百七十石であるが、その税は定額の十倍であるという。陣屋は町の北西の山間にあつて、小役人が二人、更代郡代、町の巨商である佐羽清左衛門（清右衛門）を任命して、この里を治めさせている。

※ 酒井大学頭 出羽松山藩二万五千石の藩主酒

桐生市街 雷電山（水道山）から望む



井忠方。石見守。一八〇八―一八八七。藩主在位は一八二一―一八四五。

※ 別封 飛び地。桐生は初め幕府直轄領で、慶長年間に陣屋が置かれた。領主の変遷と分給が行われ、安永八年（一七七九）、出羽松山藩主酒井忠休が加増を受け、桐生新町を領した。



※ 治処 飛び地支配のために置かれた陣屋。桐生市西久方町の寂光院及び隣の保育園のあたりに築かれていた。

※ 佐羽清左衛門 「清右衛門」とすべきか。佐羽本家。代々清右衛門を名乗った。桐生新町で織物買次商を営む。

抑此地ハ四方皆山、僅に南山断て人道を通ず^(マ)るのみならず、渡瀬川、桐生川も又左右より流れ出で、此山間を経、下野に至、刀利に合す。渡瀬ハ深山より流れ出て暴流言ばかりなし。たゞ桐生川分水によろしく、支流田園街にあまねく、水車そこはかとなくかけわたし、操糸の勞をはぶく。

そもそもこの土地は四方皆山に囲まれて、わずかに南側が山が切れて人の通る道が通じている。それだけでなく、渡良瀬川、桐生川もまた左右から流れ出て、この山間を経て、下野国に至って、利根川に合流する(間違い。注参照)。渡良瀬川は深山から流れ出て、その荒い流れは言葉に言い表わせない。ただ桐生川は分水の便がよく、その分流は田園街にあまねく行き渡り、水車があちこちに架け渡されて、繰り糸の勞を省いている。

※ 下野 下野国。栃木県。野州ともいう。

※ 刀利 利根川。

※ 刀利に合す 下野に至って合流しているのは渡良瀬川と桐生川である。それが利根川に合流するのは、下野を通り過ぎて武蔵・下総の境を少し流れてからである。埼玉県北葛飾郡

※ 操糸 撚糸業。栗橋町で利根川に合流。

山上古木によりてながむるに、たゞ人煙と山氣と凝りて半天に幕を掛たるごとし。いとものしづかなる中に水車と機声とうちまじり、わがこゝろ甚たのしむ。地勢をうつし終りて、茂兵衛、梧庵、喜太郎と酒を飲み、行厨をひらき一眺し、山を下るにかん／＼と音する処あり。これなんおもふ、此山軸皆巖にて、空虚洞をなしたるところ、踏て音を発するとなりといひ合て下る。

(四行ほど空白)

山上の古木に寄りかかって眺めるに、ただかまどの煙と山氣が入り混じって、中天に幕をかけたかのようなのである。非常に静かななかに水車の音と機織の音とが交じり合って、私の心はたいへん楽しい。風景を写生し終わって、茂兵衛、梧庵、喜太郎と酒を飲み、弁当を食べて、(景色を)一眺めして、山を下ると、かんかんと音のする所がある。これは私が思うに、この山の地下は皆大きな岩石で成り立っていて、空虚な洞窟になった所があり、地を踏むとそこに響いて音を発するのだらう、などと話し合いながら山を下った。

※ 半天 中天。

※ 機声 機織の音。

※ 地勢をうつし 風景を写生する。

(続)

田原市博物館所蔵品から

渡辺崋山筆『客坐掌記(天保九年)』⑧



(図)
猿

(図)
猿



(圖
猿)

(圖
猿)



(図) 能翁

水衣*

白大口*

垂白紋

黒紋 好次第

(図) 媼*

八変り

かり衣*

水衣 能装束の一つ、単で広袖、衿のある衣、高砂の前シテなど。

大口 大口袴

媼 翁と媼は高砂

かり衣 かりぎぬ



<p>(白紙)</p>	<p>○鹿のミン漬 油昏二納* ○ウナキ肝 ○アブ川 信州 四月 六月 光○ (函 蚕)</p> <p>頭亡 ○緑巾 (函 女性) 榭* 栗 胡桃 マキ 信州イナ郡 白髪大夫*</p>
-------------	--

油昏 油紙

榭^{かしわ}

イナ郡 信濃国伊那郡(長野県上・下伊那郡)
 白髪大夫 毛虫の俗称

平成二十四年度華山・史学研究会研修視察
 だんじりの町岸和田と中世からの
 商業都市・堺を訪ねる

平成二十四年度華山・史学研究会研修視察は、十月六日から七日、土曜日から日曜日にかけての一泊二日で行いました。

岸和田藩といえは、渡辺華山の蘭学研究仲間であつた小関三英（一七八七〜一八三九）が藩医として仕えています。岸和田に行けば何か関係する資料などが残っているかもしれないと思つたのですが、先回りして書くと残念ながらそういうものは見つけれませんでした。そこで今回の旅は「華山」を探る旅から少し脱線して、地域の歴史や文化、それらの見せ方などを考えていきたいとお思います。

今回の旅は山田哲夫・藤城精一・加藤克己・柴田雅芳・鈴木利昌・木村洋介の六名です。午前八時のひかり号で豊橋を出た一行は、新大阪・大阪で乗り換え、紀州路快速に乗って東岸和田駅に到着したのが十一時三十九分でした。

さて、岸和田といえはだんじり祭りで有名ですが、「だんじり」という独特の山車を引く「祭礼」というスタイル自体は堺を中心とした泉州地方全般に存在します。今回、岸和田市の中心地にある南海岸和田駅ではなく郊外にあるJR東岸和田駅に降り立ったのは、この日行われた「岸和田十

月祭礼」という駅周辺の十数地区が合同で行う祭りでだんじりが巡行するのを見るため、駅前には各地区のだんじりが集結します。予定の時間が近づいてくると、揃いのはつぴを来た人たちや、観光客がだんだん増えてきました。



東岸和田駅前を巡行するだんじり

十三時過ぎ、いくつもの地区のだんじりが駅前をいくつも通り過ぎていきました。派手な彫り物が施されただんじりを、はちまきとはつぴに身を包んだ若い衆やおじさんたちが駆け足で引いて

いきます。交差点が近づくと突然加速し、だんじりを傾けながらすごい勢いで曲がついていくのは確かに壮観で、沿道の観光客からも歓声が上がっていました。なるほど、一度は実際にこの目にとめておくべきものです。

ただ、拡幅工事後の広い道路で行っているためか、だんじりが心なしか小さく感じました。また、各地区のだんじりは東岸和田駅以外にも、久米田・下松駅でも集結するそうで、観光という面が強くなっているのでしょうか。このあたりは近年、田原の祭りでも同様ですが。

巡行を見届けた後、バスで岸和田市街地まで移動し、商店街を歩きました。商店街は平成二十一年の秋から翌年春にかけて放送されたNHKの朝の連ドラ「カーネーション」にちなんだ宣伝がとても多く、地元になんだドラマの威力を改めて感じました。そして「本場」だんじりが巡行する紀州街道を歩きました。昔ながらの細い道が続き、ところどころクランク状に曲がついています（田原でも寺下通りの龍門寺から田原城までの道が同じようになっています）また、町並みも民家や小売商店が立ち並び、昭和後半といった雰囲気です。

そして岸和田城の脇にある岸和田だんじり会館に到着。岸和田だんじり祭りを映像やレプリカでわかりやすく紹介していました。映像では、だんじりが狭い路地を全速力で走り、曲がり角ではだんじりに沿道の建物が接触して破損し、何人も

の人が転んで落伍していきます。勇壮かつスリリング、けが人が絶えないのも当然ですが、岸和田の人がこのお祭りにとても力を入れるのもわかります。アドレナリン全開！という感じででしょうか。

それとは別に、だんじりは昔ながらの細い道を巡行するからよいのだろうか、とも思いました。現在の岸和田のだんじりは昭和初めから前半に作られたものが多いのですが、その頃の景色にマッチするように（無意識に？）作られているように思うのです。東岸和田駅前で見たとような幅・整備された道路や、無機質なビル群とだんじりの取り合わせに違和感を覚えるのは当然なのかもしれません。もともと、これはある程度いたしかたのないことで、もしかしたら現代的な町並みにあうようなだんじり（山車）を作ればよいということなのかもしれません。

その後岸和田城跡を巡り、洋館風の駅舎が周辺の景色に溶け込んでいる蛸地蔵駅から南海電車に乗って堺市駅まで行き、今日の旅や田原の文化財について居酒屋で語り合った後、ビジネスホテルに宿泊しました。

二日目は堺を散策しました。堺は昭和二十二年に米軍の度重なる空襲を受けて市街地の大部分が灰燼に帰しているのですが、北端・南端に被害を免れて昔ながらの寺院や街並みが残っている区域があります。市を南北に貫く路面電車・阪堺電車をを使いながら探訪しました。

まず市街地の南側にある南宗寺を拝観しました。南宗寺は畿内に覇を唱えた戦国大名・三好長慶（一五二二～一五六四）が建立した禅宗（臨済宗）の寺院です。茶人の武野紹鷗や千利休が修行し、枯山水庭園は古田織部が作ったというだけあって、とても落ち着く空間が広がっていました。堺という町は騒がしく、ごみごみしている印象がありますが、ここだけ別空間のようです。異彩を放ったのは徳川家康の墓でしょうか。なんでも大坂夏の陣で家康が後藤又兵衛に討たれたことになっていて、その墓を密かに建てて祀っているそうです。歴史ある寺に引き継がれる不思議な伝説といったところでしょうか。



南宗寺前にて

次に堺の名産品である刃物を紹介した堺伝統産業会館に寄った後、山口家住宅という大坂夏の陣の直後に建てられたというから四〇〇年近い歴史を持つ旧家を訪問し、さらに堺鉄砲館、清学院に寄りました。堺鉄砲館では堺で多く作っていた鉄砲の歴史とその取り扱いについて、そういったことを趣味にしている方から説明を受けました。博物館の収蔵庫に焙烙火矢（ほうろくひや）という兵器があったのですが、この説明のおかげではじめて使い方を知ることができました。また、清学院は江戸時代末期にあった寺子屋の建物がそのまま残っており、華山の「一掃百態」寺子屋図もこうした雰囲気の間所だったのかと想像しました。

堺のどの施設でも感じたのは、ボランティアガイドの方が熱心に説明してくださったことです。直接地元の方が知っている、感じていることをお聞きできるといのはとても貴重なもので、とても楽しい時間が過ぎました。田原でも「たはらの風」というふるさとボランティアガイドの団体があります。博物館に勤める私としてはその方々にもっと感謝すべきなのだろうと改めて思いました。

その後、大仙陵古墳（いわゆる仁徳天皇陵）の横を歩いてその大きさを実感した後、堺市博物館を訪問してJR百舌鳥駅から田原への帰路につきました。

研究会員 木村洋介

華山の田原行(十四)

二月十九日(続)

国家老の川澄又二郎と鈴木弥太夫が来ます。

華山が田原に来て、三週間近く。この間、藩政についてこの二人と話をする機会も多く、互いに親しくなったのでしようか、華山は、この二人を、「川澄又二」「鈴木弥太」と記しています。

二人が来た用件は、康直が家臣の森田文左エ門へ命じた名古屋から「御妾」を探してくるという件についてです。

文政十年(一八二七)、康直は、田原藩の財政危機のために、姫路藩十五万石から持参金付きで養子に來ます。来た当初は、「新藩主康直より総家中へ御恵金渡る。」(本会報第二十三号・本稿七)と、家臣にも恩恵があったのですが、幕府から出費がかさむ日光祭礼奉行を命じられる等、再び藩財政が逼迫します。

そのため、「君上初御入部の頃は、巢鴨様、碩量院様、御奥様よりも御側女の事御勸なれど、かゝる御窮迫の中なれば唯我が私に多くのこがねを費さんことを御思召され御辞退なりし」と、華



山がこの日述べているように、藩の財政に配慮し、康直は側女をとることを辞退します。(註①)

田原藩は、財政再建のため、文政十三年(一八三〇)、「向う三カ年間格外改革儉約令を出し、田原家中宛行上下すべて二人扶持(江戸は年寄七人扶持)部屋住一・五人扶持」とする。(前出本稿七)と、大幅な引米を実施します。

「厳敷御儉法仰出されてよりハ、御初政の美ゆるみ第一に御奏者番御勤御願御志あり、それハ御同席御若き御人々と御交際よりかゝる御浮気御起り被遊されて、たゞ御役の御勢ひあるを御羨敷ハ思召さるゝ也。」

しかし、華山によると、康直が田原藩主として、実兄の上田藩主松平忠優たやうや夫人の兄の横須賀藩主西尾忠固たかと付き合い始めると、本稿で度々紹介してきた奏者番就任を望むようになります。

華山は、「御初政の美ゆるみ」について、国家老佐藤半助からの手紙をもとに、『全楽堂日録』の天保三年八月三日の項に述べています。

「田原より御使來、半助かた御直書。この御直書内々見せられしが、とかう御不快之御気色にや、御役願また御めしつかひの侍婢など多く御たくハへ被遊候半との事、まためし上りし品々田原ハなすばかりにて、一向御安からぬ公事有、かゝることにしあれば、田原へハ帰らざりしなど、いと御むつかしきこと共仰こされたり。いまだ御年御わかとおハしませバ、御やまひにも御まけ遊れしことやといと御案事申上たり。」

姫路藩では藩主にすらなれなかつた康直にとって、小藩とはいえ、田原藩の藩主。期待をもって就任し、家臣にも大盤振る舞いをし藩政へのやる気をしめしていたものの、理想と現実とのギャップ。さしずめそんなところでしょうか。

奏者番の件、側女の件、紀州藩の難破船の積荷横領の件、助郷の件、自分の思い通りにならないことの数々。国元田原で康直は、さまざまな我儘を言っていたようです。挙句の果ては、田原は食

事はナスばかり。こんなことなら、参勤交代で江戸に出府したら、もう田原には戻らない。

現代でいう都会と田舎のカルチャーショックとして分からないでもないですが、幼児の我儘そのものです。国元では、康直が病気にならないかと心配するばかり。

本稿では、華山の今回の田原行の目的を、三宅氏の系譜の調査、海防の調査として述べてきましたが、ここに、康直を説得してほしいという国元からの要請が目的に加わります。



『全楽堂日録』天保三年八月三日



本稿五で述べたように、田原に到着し長旅の疲れもとれない翌日の二月一日の項（本会報二十一

号）で、華山に、「君上御思召出るまゝ、を仰られて、可否を申あぐべきと御沙汰ある。一は御奏者番御内願之事、二は御妾之事、」と、二つの話をしたことは、康直自身、このことの可否を聞くために華山を田原に呼び寄せたのかもしれない。

康直の我儘について、八月三日の項で、華山は、見解を述べています。

「三とせさきよりきびしく御儉法御用ひに

て、「三とせ」とありますので、文政十三年＝天保元年の儉法だと分かります。

「多くの御家来の中にハ、子ども多くもたるものハ食ふ事にだにたらぬほどの棒祿にて、」前述の引米が、そうとう過酷な儉法であったことが分かります。

「その為に碩量院様の御普請ハ御孝義に侍ればはず、御家の御入用御産の御入用など、いにしえにもなき御分外の御奢りともいふべき御冗費にて、ことしハ一千両もたらぬ御ことになり行しハ、政にあづかるもの、いさめ奉らざりしあやまりなり。」

藩財政が千両の赤字になっていたようです。こんな状況で、康直は、華山に「御暴政」と言われることをします。

註① 巢鴨候は、三宅友信。碩量院は、十代藩主

康明の未亡人お利の方。御奥様は、康直の夫人お明の方。これらの立場の人が側室を勧めるということは現代ではほぼ考えられず、当時の世継ぎに対する考えが分かり、実に興味深い。

(続)

研究会員 柴田雅芳

財団法人華山会 田原市博物館 から ご案内

企画展のご案内

四月十三日(土) ～ 五月二十六日(日)

春の企画展 田原の美術 ～ 川口四郎・入江窃・光太郎展



川口四郎画「入江（紀伊浦上）」
昭和38年 田原市博物館蔵

(企画展示室一・二、渥美郷土資料館企画展示室)
新収蔵の田原市出身の洋画家川口四郎と伊良湖岬美術館にて渥美千景に挑戦した娘夫婦入江窃・光太郎作品を展示します。

展示解説

四月二十七日(土) 田原市博物館
午前十一時～

五月十八日(土) 渥美郷土資料館
午前十一時～

同時開催：渡辺華山と山本栞谷(特別展示室)栞谷は華山・椿椿山の弟子で、没後百四十年になります。

九月十四日(土) ～ 十月十四日(月・祝)

企画展 渡辺華山・椿椿山が描く花・鳥・動物の美

(特別展示室、企画展示室一・二)
渡辺華山生誕二百二十年記念、博物館

開館二十年を記念して花鳥画の優品を一堂に展示します。

栃木県指定文化財華山筆翎毛虫魚冊、乳狗図、椿山筆名花十友図など。



重文 華山筆遊魚図 静嘉堂文庫美術館蔵

講演会 十月十一日(金) 華山大祭

展示解説

九月二十二日(日)・十月六日(日)
詳細はチラシ等でお知らせします。

十月十九日(土) ～ 十一月二十四日(日)

特別展 渥美窯 国宝を生んだその美と技

(企画展示室一・二)
講演会・展示解説
詳細はチラシ等でお知らせします。

同時開催：渡辺華山名品展(特別展示室)

平常展のご案内

六月一日(土) ～ 七月七日(日)

渡辺華山・椿椿山の肖像画

(特別展示室)

田原の美術 ～ 仲谷孝夫・彦坂和夫展

(企画展示室一)

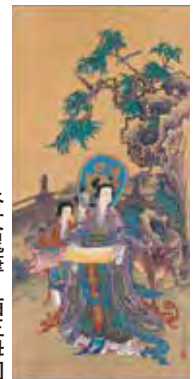
田原の歴史 ～ 田原藩

(企画展示室二)

七月十三日(土) ～ 九月八日(日)

渡辺華山の師

(特別展示室)



谷文晁筆 西王母図

田原の生活 ～ 民俗

(企画展示室一)
昔の暮らしなどを体感。

愛知県美術館サテライト展示

(企画展示室二)

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。七・八月は休館します。

渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

春の企画展 一般四〇〇円(三二〇円)

企画展・特別展 一般五〇〇円(四〇〇円)

特別展・企画展開催時は小・中学生無料

平常時 一般 二一〇円(二六〇円)

小・中学生 一〇〇円(八〇円)

(一)内は二十人以上の団体料金
東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポートもご利用ください。

休館 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日

**(財)華山会から
華山・史学研究会会員募集中**

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館

展覧会・催し物のお知らせ

見学会に参加できます。

博物館だより・華山会報をお送りします。

華山会報 第三十号

平成二十五年四月十一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

常務理事 孤田稀一

事務局長 讃岐俊宣

〒441-1342

愛知県田原市田原町巴江二二の一

TEL 〇五三一・二二・一七〇〇

FAX 〇五三一・二三・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 山田哲夫

吉川利明 林 和彦

別所興一 加藤克己

石川洋一 小林一弘

林 哲志 中村正子

小川金一 柴田雅芳

中神昌秀 増山禎之

磯部奈三子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 平成二十五年十一月一日